JMA 登山月報 第574号 平成29年1月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

登山月報

裏磐梯

明けましておめでとうございます　会長 八木原圀明 …… 2
第55回全日本登山大会・島根大会 …… 3
ランタン谷報告 …… 5
第98回 Mountain World …… 7
「山の日」制定記念 ―ふるさとの山を登ろう― …… 8
第3回海外登山懇談会「働きながら海外の山へ」報告 …… 9
2016UAAA総会報告 …… 10
ＪＭＡ、寄贈図書、編集後記 …… 12

No.574 新春号

明けましておめでとうございます

会長　八木原圀明

明けましておめでとうございます。会員の皆さん、日本中の登山愛好者の皆さんが安全で楽しい登山を続けて欲しいと思います。

昨年は私ども日本山岳協会にとっても、登山界にとっても非常に大きな動きのあった年でした。一つは言うまでもなくリオ・オリンピック開会直前の８月４日のＩＯＣ総会で東京2020オリンピックの開催都市枠の正式種目として選ばれました。

大きな喜びと課題が一気に迫ってまいりました。2020年までにどれほどの解決すべき課題があるのか想像を絶します。そのためには我々自身が何を為すべきかに考えが至ります。今の日山協の体制で対応しうるかを考えれば、全く「ＮＯ」と言わざるを得ませんでした。

それは一つ事務局体制だけではなく、つらい指摘ですが都道府県山岳連盟（協会）の組織構成そのものに問題が顕在化していると言わざるを得ません。

日本の登山愛好者人口は800万とも900万とも言われますが、登山界の組織率は１パーセントに足りません。私ども日山協を５万人、労山２万人、日本山岳会５千人として合計75,000人です。これが組織登山者の実態です。会員の超高齢化、若い会員不足は全国の問題です。

そして日本は人口減少社会に入っています。更に若者の減少、若い登山者の減少、老いも若きも組織への入会拒絶。これはよほどのことを考えて実行してゆかなければ改善される可能性はありません。

これ以上高齢化すると登山界は絶滅、消滅危惧種になりかねません。変革も時期を逸してはすべてを失いかねません。

そんな中で協会名称変更案は浮上して参りました。先ず諮問委員会を平成27年11月に設置し、年度内に答申を頂くことといたしました。

昨年４月の答申を受け、「スポーツクライミング」を加える案を５月の理事会で承認、総会で報告しその後の議論へと続きました。

平成28年度中に決定をして、29年度から新しい組織として出発するためには早めの総会開催、議決が必要でした。８月４日のＩＯＣ総会決定を受け、８月末に臨時理事会を開催して結論を出し、11月13日の定例理事会に合わせて臨時総会を開催し法人名称を「公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会」とし、平成29年４月から施行することに決しました。

日本体育協会も「日本スポーツ協会」への名称変更を検討し、スポーツ議員連盟は「体育の日」を「スポーツの日」に変更する改正法案を本年１月召集の通常国会に提出する見通しといい、「国体」も将来的に「スポーツ」の文言を盛り込む構想もあると言われています。スポーツ界も大きく変わります。

スポーツクライミングは完全なる都市型スポーツです。中高年、男女の別なく愛好者の多数は圧倒的に若者です。私どもが若い時に熱中した「岩登り」から派生、進化し特化したものがこのスポーツクライミングです。

若い世代が熱中するのは当然ともいえます。私どもも若い時はどれほど胸を熱くしたでしょうか？　自分の当時を思えば今どきの若い人たちも理解の範囲に入って来るのではないでしょうか。

「これまでの登山」をどうするのだ、と言われます。伝統的な登山の隆盛は放っておいて戻ってくるか？黙っていても歴史は繰り返してくれるか？そんなはずはありません。

昨年の８月11日から国民の祝日「山の日」が施行されました。これを大きなチャンスととらえ「山登り」を再び隆盛へと導き、非組織登山者への働き掛けも積極的に推進しましょう。日山協としてもジュニア育成等々、人も補助金も出してバックアップします。

登山界の側も「○○山岳会」だ、「○○山岳連盟」だ「○○山岳協会」だなどと言っている時代ではなくなってきています。登山界が、登山者が大同団結しなくてはじり貧になります。将来的には統合です。他のスポーツ競技団体にも目を向けてみてください。変えましょう、私たち自身が変わりましょう。

そのためにも私たちは扉を大きく開けておく必要があります。組織に若い仲間が、非組織登山者が入ってくる可能性があります。戻ります。組織は継続してゆきます。本年もよろしくお願いいたします。

第55回全日本登山大会・島根大会　世界遺産と神話の山を辿る

第55回全日本登山大会島根大会は、平成28年11月４日～６日の３日間、北海道から宮崎県までの30都道府県から170人の参加者を迎え、三瓶山と石見銀山を主会場に開催されました。

受付、開会式、記念講演は松江駅前のテルサで行い、記念講演終了後、参加者と役員はバスで宿泊地の国立三瓶青少年交流の家に移動し、開始式を行ったのち、翌日の行動に備えました。

幸い翌５日は天候に恵まれ、参加者の皆さんは早朝から三瓶山、石見銀山を踏破され、下山後バスで松江市内に移動し、予定どおりテルサで閉会式、交歓会を開催することができました。

「山高きが故に貴からず」とはいうものの、最高でも１,126ｍの山域に対して皆さんの満足が得られたかどうか確信は持てないものの、事故もなく終了することができ、充実感に浸るとともに、関係者の皆さんに心から感謝を申し上げる次第です。

以下に各行事の概要と、準備から実行に至る状況を報告します。

【開会式・開始式】

歓迎セレモニーとして郷土芸能の安来節を披露し、13時から式典が始まりました。来賓に溝口善兵衛島根県知事、開催地の松浦正敬松江市長、そして県体協細田重雄副会長をお迎えし、尾形日山協副会長の大会開始宣言、八木原圀明会長のあいさつ、地元の歓迎あいさつと続き、10回参加表彰の山本勝昭様は急きょ代理受領となりました。前月に震度６弱の地震被害があったばかりの鳥取県山岳協会の小坂秀己さんが「今年は地震などの自然災害が多く、あらためて大自然の力の強さを思い知らされたが、同時に自然からの恩恵を受けており、謙虚な気持ちで大自然に接していきたい」と宣誓。引き続き県立三瓶自然館サヒメルの中村唯史学芸員から「三瓶山と石見銀山」の演題で記念講演、県外参加者に対し歴史を踏まえた解説をいただきました。三瓶に移動後、宿舎の青少年交流の家で地元竹腰創一大田市長を迎え開始式を行いました。

開会式

【登山行動】

日本200名山の三瓶山に難易度を変えて４コース、世界遺産の石見銀山に１コースを設定しました。宿舎では満天の星空のもと起床、Ａコースが午前６時に出発、次いでバス移動の必要なＥコースが６時50分に、残りのＢＣＤコースは朝食後の８時30分から相次いで出発しました。

交流の家に設置した現地本部は、通信を密にして各コースの状況把握に努め、救護体制も各コース帯同看護師１名と本部詰め医師、看護師各１名により対応しました。途中離脱や軽症の方がいたものの幸い大事に至らず、一隊を除き各コースそれぞれ概ね設定時間内に下山が完了しました。

【閉会式・交歓会】

バス移動で松江市内宿舎に戻った後、午後６時から松江テルサで閉会式が行われました。仙石富英常務理事の講評、次回開催地の北海道岳連への聖杖引継ぎ、

Ｄコースの皆さん

男三瓶山々頂にて

そして尾形副会長が大会終了宣言を行われました。

皆さんお待ちかねの交歓会は、細田島根県体協副会長の乾杯発声で始まり、コース別にテーブル配席となった参加者の皆さんは、樽開きの酒や各地からの祝酒で大会目的の一つである参加者相互の縁を深められました。終盤には神話の国島根の伝統芸能「石見神楽」が宇野保存会によって上演され、八岐大蛇（ﾔﾏﾀﾉｵﾛﾁ）と素戔嗚尊（ｽｻﾉｵﾉﾐｺﾄ）の激しい動きに参加者一同本場の神楽を満喫された様子でした。さらに翁媼役、お囃子の横笛の演奏者が大会役員ということもあって称賛を浴びるなど、予想を超える盛り上がりのうちに幕となりました。

【最終日】

オプショナルツアーに参加される１班を見送り、大会を無事終了しました。

準備から受け入れまで　２年半前に初めて開催順番が回って来ることが分かったものの、県内加盟団体は高体連登山専門部を含めても７団体しかなく、大会成功のために各団体総力を挙げて対応することを確認。以後延べ13回の実行委員会を開催しました。

検討課題は、実施時期、テーマ、山域（コース）、式典会場及び宿泊場所、役員体制、通信手段、救護体制等多岐にわたり、一つひとつ協議して決定していきました。先進地視察についても徳島県、宮城県に役員派遣をして事例を参考にし、また貴重なアドバイスをいただきました。本大会のあり方の見直しが検討されているとの情報が日山協からあったものの、その内容が不明確ななかで、過去の大会を参考に島根らしさを追求し大会準備を進めることとなりました。大会名称の変更も宮城大会の場で初めて公表され、急きょ予報の修正をすることになりました。

実施時期　紅葉の最盛期、天候の特異日を見込んで11月初旬に決定しました。

山域（コース）　200名山の三瓶山と世界遺産の石見銀山を体験してもらうのがベストと考え、難易度を考慮してコース設定を行いました。ただし、１日という限られた時間内で、全日本登山大会という名称にふさわしいような山行内容は何か、また例年の参加者の年齢構成から考えていかに安全に、かつ満足してもらえるのか、議論を重ねました。

交歓会「石見神楽」上演

Ｃコースの皆さん（男三瓶山の登り）

当初は申込みの出足が遅く、また難易度４のＡコースに大きく偏って申込みがあったため、役員体制や行動時間を大幅に変更し、参加者の希望どおりコース受け入れをすることとしました。

テーマ　出雲神話の国譲りの舞台となっていること、また世界遺産登録10年を翌年迎えることから「世界遺産と神話の山を辿る」というスローガンを掲げました。

式典会場及び宿泊場所　参加者の利便性、宿舎のキャパシティ、運営の容易さを考え、開閉会式を松江市で実施、１泊目は国立三瓶青少年交流の家を利用、２泊目を松江市内とすることとし、バスによる計画輸送を実施することとしました。幸い、往路・復路ともに、渋滞もなくスムーズな移動が果たせました。

役員体制　岳連加盟団体は漸減しており、すべての団体に動員を依頼、またコース受け持ち団体を決め、コースガイド作成、下見など主体的に取り組んでいただきました。特に集団登山引率経験者の多い高体連登山専門部及びＯＢにお世話になりました。また、行動日寸前まで役員に変更が出て、気をもむこととなりました。

通信手段　事前テストを踏まえ、三瓶現地本部と三瓶行動隊とは業務用無線機及び携帯電話を、また石見銀山隊とは携帯電話を使用することとし、不感地帯に対応するため男三瓶山頂に中継班を設け万全を期すこととしました。また、隊内通信も各班、支援に業務用無線を配備しのべ38台と、本部用に交流の家の無線機も借用し運用しました。

救護体制　例年の参加者の年齢構成を考慮し、各隊に看護師、本部に医師、看護師を配置することとし、関係

者に適任者選出、ボランティア協力の依頼をしました。

式典　おもてなしの精神でいかに厳かに、かつ和やかに開催できるかを考え、開会式では安来節を、交歓会では石見神楽を上演することとしました。特に大蛇の火花対策では地元消防との協議に時間を割くこととなりましたが、結果として参加された皆さまには好評を博したと思っています。

満足な対応ができなかった点もあったとは思いますが、無事に大会を終了することができ、よい思い出をお持ち帰りになられたなら幸いです。結びに、あらためて参加者、関係者の皆さまに感謝を申し上げ、第55回大会の報告といたします。今後、大会のあり方については更に見直しが行われ、より良い大会として発展されることをお祈りします。（**大会事務局長　岩成　久**）

ランタン谷報告

会長　八木原圀明

昨、平成28年11月にマカルーとカンチェンジュンガ登頂60周年祝賀会に合わせてネパールでアジア山岳連盟総会があった。

その総会前に春のマナスル登頂60周年祝賀会時に日本の登山界が集めたネパール地震義援金の最後のお金を震源地近くの学校再建費用にとネパール山岳協会に託したが、その学校の完成祝い式典に参加して欲しいとアン・ツェリン山岳協会長に言われていたため早めにネパール入りしていた。

しかしアン・ツェリン会長からはナシのつぶて。連絡をとると「道路が壊れて、ヘリコプターでしか行けないので中止を連絡したはず」という。我々のところには届いていない連絡であった。仕方なくカトマンズ在住の知り合いの日本人の皆さん方へのあいさつ回り。

本当の両峰初登頂は1955年であり、60年目は昨年春であったが、昨年４月25日正午前にカトマンズ北西77ｋｍ付近を震源とする大地震が発生しネパール人800万人が被災し、約8500人が死亡するという大災害に見舞われたために延期されていた。

日本からは1970年の日本山岳会東海支部のマカルー南東稜隊の登頂者田中元さんと尾崎祐一さんと隊員であった尾上昇ＪＡＣ元会長が参加された。この隊の顔であった原真ドクターは亡くなった。

アジア山岳連盟総会、マカルー・カンチ60周年に合わせ地球温暖化、気候変動のシンポなどもあり盛りだくさん過ぎる感じであった。

チベットの山々をめぐり続けておられる中村保、永井剛コンビもカトマンズへ入られ、上記の会に参加されていたがラサへ戻ってから帰国する予定だが、その前にヘリコプターでランタン谷へ行くという。

偶然一緒になった昼食時に神﨑忠男前日山協会長と「金持ちですねー」などと言って羨ましがっていたが、「考えてみれば我々２人がそこに同乗すれば料金が半分になりませんか？」ということになり、中村さんたちのエージェント社員に聞くと「乗れる」という。

いくら行ってみたいランタン谷でも我々２人だけでヘリコプターをチャーターするなど、財布と相談するまでもなく夢想だにできなかった。しかし４人で割るとなると何とかなるか？と貧乏人２人は清水の舞台から飛び降りることにした。決まった。

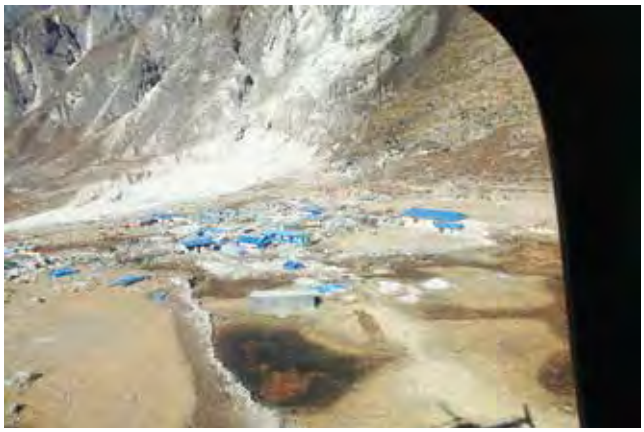
翌21日早朝、空港南西端のヘリポートから飛ぶ。昨年の映画「エヴェレスト 神々の山嶺」撮影時にルクラまで飛んだ時と同じ場所。あの時に濃霧の空港で滑走路を外れて草地にめり込んでしまったトルコ航空機がここまで運ばれている。買い手がつき部品として売るために解体中。哀れな姿。

薄雲が全天を覆っているが、天気は良くなるという。出発。少し旋回するとランタン谷、ランタンリルンめがけて一直線に北進。カトマンズ盆地の建物の多さ、高層建築物の多さに驚かされる。

私の初めてのネパールは45年前の1971年３月だったがもちろんリングロードなどは無く、盆地内はカトマンズ中心３都市以外は集落が点在するのみだった。

ヘリコプターは眼下の尾根の木々や家の屋根を引っ掛けて行くかのように飛ぶ。左手にはガネッシュ・ヒマール、マナスル三山、もっと遠くにアンナプルナ連峰もよくわかる。

だんだんと狭まる谷へ入ると眼前にランタンリルン



が聳え立ち、山の斜面に地滑りの痕などが見える。

右岸のランタンリルンからの雪の尾根、小さなアイスフォール様の下に大きく急峻な岩盤が現れ、岩盤基部から下のランタン谷まで砂地のような斜面が見える。

ガイドによるとあれが昨年の大地震の際に起きた雪崩、地滑りによって現れた岩盤とランタン村が埋まっている砂地状の斜面だという。あふれ出る涙をぬぐいながらシャッターを切り続ける。パイロットは何度も何度も旋回する。

1989年のマッキンリー山田隊遭難後に日本から行った捜索隊が山田昇、小松幸三、三枝照雄の遺体発見、収容をあきらめて捜索中止、帰国を決定した後の「最後の最後の賭け」の捜索フライトに出た時、デナリ・パス下の斜面に見つけた３つの黒い点。

その上を何回も何回も旋回するセスナ機から「赤い物体」が３人の遺体であることを確認した隊員が８ｍｍカメラを回しながら「あれだ！あれだ！」と絶叫するシーンを思い出す。

ヒマラヤとマッキンリー、登山中の遭難と地震に起因する雪崩、地滑りによる生き埋め遭難。いずれにせよ大自然の持つ大きな力を思う。

数度の旋回後、ヘリコプターは上部に向かう。国境ライン、ランタンの山々、下にあるはずの中国のキーロンとネパールを結ぶ新しい道路上空を撮りまくる。何時からかは忘れたが１番最初にネパール、中国間に開かれたコダリ道路は通行禁止になっているという。

下にかなりの鮮やかな青い屋根の建物がかたまっている村が見える。そこに降りるという。チーズでも有名なキャンジュン・ゴンパ（3840ｍ）であった。村のある草原の下は幅の広い河原が見える。

この村も石積みの建物であったためほぼ全壊したというが１年半たった今はもう２階建て３階建てのコンクリートを使ったホテルなどが建ち、建設中の大きな

ランタンリルン(左奥）を背景に

家もたくさんある。聞くと政府の援助など待ってはいられない、という。

１年中とは言わなくともトレッカー、ツーリストがたくさん来て収入もあり、これからも見込める人たちはたくましい。自立しているというか自立しなくては生きては行けないということだろう。

この高さ、寒さの中でささやかながらビニールハウスで野菜も作っている。周りには立ち木１本生えていない。厳しい環境であるがまだ降雪はない。

ゴンパも残っているというので持参した高崎ダルマを復興祈願として納めてほしいとロッジの主人に頼む。英語の説明書付きである。

外国人女性トレッカー（？）が裏山を登ってゆく。高所順応トレーニングか。甘いミルクティーを飲み、チーズを買い、持参のビスケットを食べる。快晴の空の下は暖かい。

帰途に就くがパイロットは「ゴサインクンド」上空を通って帰るという。昔は行ってみたいトレッキングコースの１つだった聖なる湖（池？）である。

飛び立つとすぐに壊滅したランタン村上空に着く。砂地（？）の１段上にはたくさんの青い屋根の家が建っている。ここもキャンジュン・ゴンパ同様早くも再建が始まっている。村ができ始めている。トレッカーの姿も見える。再建の手助けは現地を訪れることである。良かった。

ゴサインクンドの湖の上を数回旋回するとカトマンズへと向かう。２段になった濃い蒼緑色のきれいな湖だった。

カトマンズ上空は早くもカスミがかかり始め、もやっていた。ひどいスモッグでもあった。まっすぐに飛べば片道15～20分ほどのフライトであった。

第98回 Mountain World

ハーリン・ダイレクト50周年のアイガー

池田常道

1960年代の熱狂は遠い昔の話。日本人クライマーにとっては登り尽くされたということなのか、すっかり忘れられた感のあるアイガー北壁だが、ヨーロッパ・クライマーにとってはまだまだ挑戦の対象としての価値を失っていない。一昨年からハーリン・ダイレクト（1966年）50周年の節目にあたる昨年にかけて、ひさびさに活況を呈した。

まず2015年３月19日、トム・バラード（26、イギリス）が北壁オリジナル・ルート（1938年）を登って、冬季６大北壁単独登攀を達成した。前年12月21日に開始して、ひと冬の間に完登したものである。この記録とバラードについては15年４月号に詳しく書いた。

過去150年来初めてといわれた好コンディション（好天と寡雪）にめぐまれた夏には、北壁最難ルートが拓かれるなどの成果が挙がった。

８月、ロベルト・ヤスパー（ドイツ）とロジェ・シェーリ（スイス）が北壁右側にアイガー・オデッセーを開拓。1400ｍ、８ａ＋のルートは、それまでのパシエンシア（800ｍ、８ａ）を上回る最難ルートとなった。シェーリはミッヒ・ケメター（オーストリア）と組んでパシエンシアのフリー第２登にも成功した。ヤスパーは2009年に日本ダイレクト1969年、10年にハーリン・ダイレクト1966年、13年にギリニ＝ピオラ・ダイレクト1983年と、この壁に拓かれた代表的「ディレッティシマ」３本をフリー化していた。

同じ夏には、アメリカ女性サーシャ・ディジュリアン（22）がカルロ・トラヴェルシ（27）と組んでマジック・マッシュルーム（600ｍ、７ｃ＋）を登った。所要18日間。女性によるレッドポイントは初めてである。

2016年は再びロジェ・シェーリの活躍で明けた。ニュージーランド女性メイヤン・スミス＝ゴバトと組んでLa Vida es Silbar（７ｃ）をレッドポイントしたのである。1999年にダニエル・アンカーとステファン・ジークリスト（スイス）が初登攀し、03年にウエリ・シュテック（スイス）と組んだジークリストがフリー化したルートで、パシエンシアが出現する前の最難ルートだった。シェーリはこれで、北壁のフリー難度ベスト３をすべて登ったことになる。

冬を間近に控えた11月29日、トム・バラードがアイガーに戻ってきた。マルチン・トマシェフスキ（ポーランド）と２人で北壁の左手を限る北ピラーに新ルート、タイタニック（1800ｍ、６ｂ、Ａ３，Ｍ５）を拓いたのである。

北ピラーは1968年にトニー・ヒーベラーとメスナー兄弟によって登られたとされているが、これはもっぱらピラー西側のフランケをたどっている。その直前にはポーランドのタデウシュ・ワウカイティス、リシャルド・シャフィルスキら４人が、ピラー下部から北東壁ラウパー・ルートへと抜けていた。70年にはスコットランドのイアン・マクイーチェランら３人が、下部に固定ロープを設置して北東壁上部に抜けた。2002年にはスイスのペーター・ケラーとウルス・オーダーマットが、スコットランド・ルートの横20ｍにボルトを打ち込み、翌年フリー化しようとしたが成らず、固定ロープを切断しただけに終わっていた。バラードのタイタニックはこのルートの右手をたどるもので、ポータレッジで８回のビバークを要したという。

最後に昨年12月29日～30日、1991年にジェフ・ロウ（アメリカ）が冬に単独で登ったメタノイアがトーマス・フーバー（ドイツ）とシェーリ、ジークリストのスイス勢によって四半世紀ぶりに第２登された。メタノイアは日本直登ルートとハーリン・ダイレクトの間を直登するもので、ロウは30ｋｇのホールバッグを荷揚げしながらポータレッジでビバークを重ね、９日目の３月４日、頂上に抜けた。5.10、Ａ５の岩とＡＩ６の氷から成り、エイド部分は10％、ボルトは一切使わなかった。フーバーはさっそくロウに連絡し、ルート内容のすばらしさやボルトなしで挑んだ先見性に賛辞を贈ったという。

アイガー・オデッセー(8a+) 下部を登る
ロジェ・シェーリ提供

新連載

「山の日」制定記念
―ふるさとの山を登ろう―
ふくしまの山の美しさ

福島県内には、平成の合併以前は90市町村があり、各市町村別のうつくしま百名山を決め、そこに住む地域の方々による登山道の整備を進め、ふるさとの山を大事にしてきました。それが平成23年３月11日の震災以降、浜通り一部の人たちは全村避難地域になり、ふるさとの山に登ることさえ難しくなってしまいました。５年経った今、東電第１原発から30ｋｍ離れた山については、登山は安全であるにもかかわらず、福島の山に登ることにためらう人がいることは確かです。風評被害がまだ残っていますが、ふるさとの山は震災前と変わらずそこに生活する人も変わりない生活を送っています。原発事故で福島は大変だけど、福島の山は壊れてなんかいないですよ。登山道もちゃんとしています。

私の住む二本松市には、智恵子抄で有名な安達太良山があり、平成28年５月の山開きには１万人の登山者が訪れました。安達太良山の頂に、こんなに多くの登山者が登りに来てくれて、そして５年経ってようやく多くの登山者が、安達太良山に戻ってきてくれたことは嬉しいニュースでした。

多くの登山者が来て美しい山がある。安達太良山でほんとの空を見つけられれば思い出の登山になる事と思います。　　（福島県山岳連盟副会長　佐藤章一）

吾妻小富士

好展望で知られるインカ・クオリー・トレイルとマチュピチュ遺跡へ繋がるハイキング・ハイライト

インカの古道を辿り
マチュピチュ遺跡を目指す旅 11日間

発着地	出発日	旅行代金
東京	3/17（金）	¥598,000

※燃油サーチャージ（2016年12月20日現在）は不要となっておりますが、今後変更になる場合は、ご旅行代金ご請求の際にご案内いたします。

旅行企画・実施　観光庁長官登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪☎06-6444-3033　名古屋☎052-581-3211　福岡☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

裏磐梯

冬の安達太良山

紅葉の安達太良山

DVD「北海道の山スキー」好評で500部増刷！

北海道山岳連盟創立60周年記念（2012年）事業として発売したDVD「北海道の山スキー」（北海道パウダースキー20山の小冊子付）は、全国から再販希望の声が寄せられ、このたび500部増刷いたしました。山スキーの基礎から応用まで、わかりやすく見やすいという視点で組み立て、編集してあります。このDVD教程を何度も参照しながら滑った結果、深雪滑りが格段に上達した等、うれしい声も聞かれます。

価格は、日本山岳協会会員のみなさまには、送料込み2,500円です。

＜申し込み先＞

〒059-0011　北海道登別市常磐町1-40-4　藤木晴夫
電話：0143-85-5897
メールアドレス：fuji8ma@nifty.com

第３回海外登山懇談会「働きながら海外の山へ」報告

11月17日の夜、代々木のオリンピックセンター80人用会議室において、上記懇談会が開催されました。今回のテーマは「働きながら海外の山へ」。近年は景気も芳しくなく、働いていたり子育てしている世代が存分に山を楽しめていない状況があります。そんな若い世代に向けて、海外の山を楽しむきっかけを得てもらえればと、今回の懇談会を企画しました。講師は坂上光恵氏と山岸尚将氏のお二人。一般参加者は19名。

まず坂上光恵氏の講演「私の海外の登山・山スキーの旅－山と仕事と」から。坂上さんは私立中高の先生をしながら、1987年から30年に渡り、毎年海外の登山に出かけています。多くは中央アジアやロシアですが、ヨーロッパからオセアニア、ネパールと世界中に渡り、７,000ｍの高峰から２,000ｍ未満の僻地の山まで多様な山に足跡を残しています。坂上さんの海外登山は、過去に現地で知り合ったロシア人ガイドからの誘いで出かけることが多いとのこと。人脈を大切にし、声をかけられた時にはそのチャンスを逃さない、というのが信条で、毎年の海外登山を実現してきたそうです。一般的に女性は家庭に入ると動きにくくなると思われていますが、仕事を手放せない男性よりも、子育てに目途が立てば自由が利くようになる女性の方が海外にも出やすい、とのことでした。正しい趣味は人生を豊かにする、と生き生きとした表情で話された言葉が印象的でした。

山岸尚将氏からは「子連れだからこそ海外へ！　家族で楽しむアメリカクライミング」との話をいただきました。山岸さんも奥様も、結婚前から本格的な山やクライミングをやっていたのですが、出産前後の一時期はやはり出かけられなかったそうです。しかし生後３ヵ月くらいから子供を連れて岩場を訪れるようになり、やがて子供を連れて家族で海外のクライミングをするようになります。不確定な要素の高い山歩きよりも、ロープで確保を継続できるクライミングの方が子供の安全管理が楽。いつもキャンプ生活が基本で、その方が食事も自由に選べるし人目も気にしなくてよくていい。人の少ない岩場の方が落石の危険も少なく、また登攀時間も気にしなくていい。都会に近い岩場は犯罪などのリスクがあるが、田舎の岩場の方が落ち着いて遊べるなど、国内でも海外でも、子供を連れてクライミングをする時に気をつけるべきことを細かく紹介していただきました。また家族でマルチを登るための練習もしたこと、岩場選び、ルート選びは安全性を考えて子供優先で選んでいること、しかしそれでもいつもエスケープや時間のことを考えて親は本気トライになることなど、自由に楽しんでいるように見える中にも、子供連れだからこその配慮が多くあることも話していただきました。

お二人の話ともに共通するのは、環境が変わっても諦めないで、その環境の中で登るための努力をしている点と思います。これまでと全く同じことはできなくとも、新しい環境の中でもそこでできる挑戦を見つけ、常にそれを楽しむこと。そして人脈を大切にしてチャンスは逃さないこと。それらが仕事や家庭を持ちながらも、登山やクライミングを続けていくためのコツであると、お話しを聞いていて感じました。

今後ますます海外の山は、国内と同じように出かけやすい環境になっていくものと思います。「海外遠征」などと言っていた時代と比べて明らかに、手続きも楽しみ方も変わってきています。日本の多くの登山者に海外の山を楽しんでもらえるように、今後も情報発信をしていきたいと思っています。

せっかくの貴重なお話でしたが、参加者を多く集められなかった点は残念でした。広報のやり方など、今後に改善していきたいと思います。（文責　澤田　実）

坂上光恵講師

山岸尚将講師

2016UAAA総会報告

日時　2016年11月18日
場所　ネパール・カトマンズ
　　Boudha hall, Hyatt Regency
日本からの参加者　八木原会長、小野寺　記

総会に先立ち、理事会が前日の夜に行われた。議題は１ヶ国の参加加盟団体数の事である。議長のPae氏によるとLee会長の提案で１ヶ国３団体までにしたいとのこと。要はモンゴルの事である。３団体が乱立(と言っても１団体あたりの加盟者数はかなり少ない)し、一方はＵＩＡＡのみに加盟、一方はＵＡＡＡのみに加盟とややこしい。それが今回は３団体ともＵＡＡＡ加入との希望である。どの団体をその国の代表にすべきか等意見が分かれたが、結局３団体までの加入はＯＫとし、翌日の総会に諮ることになった。しかし、本来はその国の内部で調整すべき、という意見が大半であった。

次に、今回の総会は、Makalu-Kanchenjunga登頂60周年記念セレモニー（本来は昨年５月の予定であったが地震のため延期していた）と並行して行われたことである。会場自体は隣にあったが、主管国のネパールはAng Tshering会長の出入りが多く、重要な場面で席にいないことがあり、最後、Lee会長からあまり動くな、と強く言われていた。

総会の参加は10ヶ国15団体であった。

参加団体はＣＡＣ（Coran Alpine Club)，
ＫＡＦ（Korean Alpine Federation)，
ＪＭＡ（日本山岳協会)、
ＪＷＡＦ（日本勤労者山岳連盟)、
ＩＭＦ（Indian Mountaineering Federation)，
ＣＴＭＡ（Chinese Taipei Mountaineering Association)，ＫＡＣ（Kyrgyz Alpine Club)，
ＣＴＡＡ（Chinese Taipei Alpine Association)，
ＩＭＳＣＦ（Iran Mountaineering & Sport Climbing Federation)，
ＣＭＡ（Chinese Mountaineering Association)，
ＭＳＣＦＲＫ（Mountaineering and Sport climbing federation of Republic of Kazakhstan)，
ＭＣＭＡＣ（Mongolian Central Mongol Altai Club),ACM(Club Alpine Mongolia)，
ＣＨＭＣＵ（China Hong Kong Mountaineering & Climbing Union)、そして主管国のＮＭＡ（Nepal Mountaineering Association）である。

その他にＵＩＡＡ会長のFrits Vrijlandt及び事務局マネージャーのSophie Gerardが参加した。会議はアジェンダに則って行われた。

1. 開会

ＮＭＡ会長Ang Tshering Sherpaの言葉があり、ＵＩＡＡ会長Frits Vrijlandtの挨拶、In Jeong Lee会長の挨拶、定足数、アジェンダの確認など通常通りの手順で行われた。今年の理事会の議事録は次回出来るとのこと。

2. 会長及びＵＡＡＡオフィスの報告

⑴アジアピオレドール賞

アジアLee会長が個人で$1,000を出して選出した。

受賞は日本の黒部渓谷ゴールデンピラーの佐藤祐介氏等、ガンガプルナ南壁新ルート開拓の韓国隊、及び中村保氏であった。

⑵ＩＭＭ（International Mountain Museum）にＵＡＡＡコーナーを作り、Lee会長が$5,000寄付したとのこと。

3. 各加盟団体の活動について

参加国の2016年前半の活動について、PowerPointや口頭で発表があった。ざっくばらんに言うとどの国もあまり変り映えしない。労山からは遭難についての分析報告、カザフスタンからは今年のサマーキャンプに日本から数人参加したことについて、謝礼とその報告があった。日山協も特に最近の動向ということでスポーツクライミングが五輪種目に決まったこと、日山協の名称変更が2017年４月１日からなされること、田部井さんご逝去のこと、「山の日」施行などについて報告した。

4. 財政レポート

ＣＴＭＡのHank氏から報告があった。総額はともかく、(Fritsを意識して）ＵＩＡＡより取り損ないがないとは言っているが、一度も集まりにも来ない国からは全く入金されていない。監査はＣＨＫＭＣＵのFrederick氏であるが本人欠席で、代理が問題なしとのメールを読み上げたのみである。

5. サマーキャンプ

カザフスタンのカーリータウでは来年も行うとのこと。7/21日～28日の８日間である。今年の日本の参加者の１人からは何とか期間を延長してほしいと言われており、話をしたが、元々この山はトレッキング

ピークであり、難しいとのこと。しかし個々の相談は受ける？　とのニュアンスであった。

6. メンバーシップについて

定款においては今まではメンバーシップについての細かい規程はない。冒頭にも記述したが、特にモンゴルでは山岳会や山岳連盟が別々にできて各々がＵＡＡＡ会員になることを希望している。ＭＮＭＦ（モンゴル国立山岳連盟）が入会しそうである。また、ネパールでもＴＡＡＮ（ネパール旅行業協会）とＥＯＮが名乗りを上げている。ネパールの場合はオブザーバになりそうである。来年の理事会にはその他に入会希望として、ブータン、タジキスタン、ウズベキスタンなどの国が上がってくる。

7. その他

⑴ＩＭＭに対する展示物の募集があった。

⑵ＵＡＡＡのWeb-siteの保守更新をイランが無償で行っており、今後も継続とのこと。

8. 来年以降の会議予定

⑴2017年理事会はノボシビルスク、総会はイラン（ＵＩＡＡ総会も同時）

ＵＩＡＡ総会でもイラン開催には難点が多いとのことであったが、結局は開催方向らしい。

⑵2018年理事会は未定、総会はモンゴル・ウランバートル（ＵＩＡＡも同時）

ＵＩＡＡがアジアで総会を行うときはＵＡＡＡも同じ場所で行うという不文律があるとのこと。

⑶2019年理事会は台北

9. モンゴルからの提案

閉会直前にモンゴルから提案が出てきた。突然に文書を読み上げての提案であり、内容は２つであり、１つはＵＩＡＡに対する名誉会員の推薦、１つはこれもＵＩＡＡに対してであるが、「女性と登山」委員会立ち上げについてであった。名誉会員については歴代のＵＡＡＡの会長を並べ、さらにその時に今の会長のＬｅｅ氏が歴任した役職を上げ、ＵＩＡＡ名誉会員に推薦したいとの申し出であった。神﨑ＵＡＡＡ顧問が、質問しＵＡＡＡ立ち上げ時を始め、その時その時で多くの関係者が苦労している、その人たちの名前を全て言えるか、とのことであったが、議長の見解があり、今回はただの提案であり、詳細は来年の理事会で検討しましょうとのことであった。

10. 閉会

InJeong Lee会長の挨拶の後、無事終了した。

以上

Makalu-Kanchenjunga
登頂60周年記念カトマンズ市内パレード

翌19日は記念パレードということで、カトマンズ市内を両ピークの登頂者を車に乗せてパレードした。日本から参加したMakalu登頂者の田中元氏、尾崎祐一氏もそれに加わった。

車上にいるのは、田中さんとカズベク

パレードの一団

平成28年度（28年12月）
常務理事会報告

日　時　平成28年12月8日㈬
18時00分～20時50分
場　所　岸記念体育会館・4F特別会議室
出席者　八木原会長、尾形・國松・高橋・亀山各副会長、小野寺、森下、京オ、瀧本、水島、仙石、中瀬、各常務理事、中畠監事
委　任　西内常務理事

1．議　事

⑴平成28年度11月常務理事会議事録の承認について（事前送付済）
異議なく承認された。
⑵平成28年度理事会（第３回）議事録の承認について（事前送付済）
異議なく承認された。
⑶平成28年度臨時総会議事録の承認について（事前送付済）
異議なく承認された。
⑷2017年ＢＭＣサマー・クライミング・ミートへの派遣について
小野寺事務局長が資料に基づいて説明、希望者を公募することで、異議なく承認された。
⑸ミズノスポーツメントール賞候補者推薦について
小野寺事務局長が資料に基づいて説明した。過去にも推薦したことがあるが、ハードルが高く選ばれたことはない。今回は見送ることで承認。
⑹ＪＯＣ女性スポーツ賞候補者推薦について
小野寺事務局長が資料に基づいて説明した。推薦要項は指導者でそれなり実績のある人を要求しており、推薦は見送ることで承認。
⑺新春懇談会特別表彰候補者推薦の承認について
小野寺事務局長が資料に基づいて説明した。各岳連から推薦のあった長谷川清（福井）、稲泉眞彦（山形）、小森栄治（茨城）、相澤岩男（宮城）、尾形一幸（福島）の各氏と指導委員会から推薦された古屋寿隆（山梨）、山根幸雄（山口）の両氏が承認された。また、日本山岳グランプリで次点となった「はんしん自立の家・甲山登山隊」には、新春懇談会の特別表彰を、という意見が日本山岳グランプリ選考委員会からあり、これも異議なく承認された。
⑻第６回日本山岳グランプリの承認について
小野寺事務局長が資料に基づいて説明した。提案通り沖允人氏への日本山岳グランプリ贈賞が承認された。
⑼平成28年度第４回、29年度第１回理事会、総会の日程について
小野寺事務局長が資料に基づいて説明した。平成28年度第４回理事会を３月４日㈯、平成29年度第１回理事会を５月13日㈯、平成29年度定時総会を５月28日㈰に開催することを承認。平成30年度については５月26日㈯に第１回理事会、６月10日㈰に定時総会を開催する予定とした。
⑽スポーツマネージャーの候補者推薦について
専門性、条件性を考慮して小日向徹選手強化委員長を推薦することで、異議なく承認された。
⑾ＪＳＣからの依頼、鈴木長官プラン「協働チームによるコミュニケーションの実施」
競技部内で人選を行うことで了承。
⑿日体協・次期理事候補者の推薦について
尾形副会長を推薦することになった。ただ、加盟団体推薦理事９名の枠があるので、事前にこの役職について日本体育協会に確認して、推薦することになった。
⒀山岳スキー日本選手権大会の再開について
尾形副会長から資料に基づいて提案があった。昨年まで続いていた山岳スキー日本選手権を、それまで協力いただいていた長野県山岳協会にも説明に行って、本年から中止にした経緯がある。その舌の根も乾かぬうちに再開するので、相当強い覚悟で運営しなくてはならない。根強い参加者がおり、来年４月から再開したいとのこと。個人に頼らないこと、体制をしっかり整える事など、担当者の覚悟を考慮して提案通り承認された。平成29年度事業計画の承認は３／４の理事会であるが、事前に各方面の許可等準備を進めていきたい。

2．報告事項

⑴内閣府立ち入り検査予定
小野寺事務局長が資料に基づいて説明した。
⑵契約審査会報告（マーケティングパートナー・ビジネスパートナー契約（別刷り）及びオフィシャル・サプライヤー契約）
尾形副会長より資料に基づいて博報堂との2020年までの複数年契約について報告があった。次いで、ゴールドウインとのオフィシャル・サプライヤー契約についての報告があった。
⑶英国ＮＲＣ訪問の報告
西内登山部長が英国・国立レクレーションセンターを訪れた訪問記が、本人委任のため、文書で紹介。
⑷自然保護研修会報告
小野寺事務局長が資料に基づいて文書を紹介した。
⑸積雪期山岳レスキュー実施要項について
小野寺事務局長が資料に基づいて実施要項を説明。既に募集開始している。
⑹「スポーツクライミングを科学する」について
（一社）日本臨床スポーツ医学会主催のセミナー。１/28㈯に本協会のスポーツクライミング関係者２，３人が講師を務める。
⑺日本スポーツ賞（楢崎智亜選手）の決定報告
小野寺事務局長が資料に基づいて、楢崎智亜選手が選ばれたことが報告された。
⑻スロベニアＷＣ報告について
森下競技部長が資料に基づき報告を行った。
⑼日本のWinter Climbers Meet 企画書について
既に予算的には承認されている企画であるが、正式に企画書が届いたことが報告された。
⑽第73回福井国体リハーサル大会について（ジャパンカップの変更）
森下競技部長が資料に基づき報告を行った。これまで国体のリハーサル大会として位置付けて開催してきたリードジャパンカップを福井国体会からは、リードジャパンカップに変わる大会でリハーサル大会を行うことで検討していることが報告された。

3．指導員・審判員／検定結果報告

スポーツ指導者専門科目修了認定申請について
・ＳＣ指導員
茨城開催：７／９～８/21
（茨城）小森栄治、佐藤常雄、菊池正則、笹原健一、佐藤正彦、黒沢昌弘、國井敬一、宮下直人、是枝正國、木村実、石井裕子、阿部勝義、森正夫
（千葉）西谷善子、（群馬）滝口諄人、（栃木）根津宏毅、（福島）落合淳利
受講者：17名全員合格とする。
神奈川開催：９/25～11月27日
吉本かおり
・ＳＣ上級指導員
山口開催：10/29～30日　７名合格
（鳥取）山田佳範、（福岡）井関徹、（山口）廣兼純、（広島）大下笑香、（岡山）大杉忠則、山田忠司、（島根）石丸秀樹
神奈川開催：９/25～11月27日
中田唯、岸本郁代
・ＳＣ主任検定員
宮崎開催：10月23～24日
（宮崎）下村真一
中国ブロック開催：11/19～20日
（広島）佐藤建
上記について、提案通り異議なく承認された。

4．後援報告、協賛等の依頼について

⑴大阪府岳連後援名義終了報告
⑵アイスクライミング後援申請取下げ
⑶「雪崩防災週間」後援名義承認
上記３件について、提案通り承認された。

5．専門委員会動静

11月（10月21日～12月７日）
〔報　告〕
⑴ジュニア・普及 委員会
10月21日㈮　出席３名、委任３名
ア）ジュニア登山教室実施都道府県は、24県である。
イ）全日本登山大会・島根大会報告について　11月４日㈮～６日㈰
・170名/コースによって偏ったため、分散をした。
ウ）なすかし雪遊び隊2016利用団体申込

書提出について
・２泊３日の日程に変更。プログラムの内容の検討。
エ）平成28年度後期事業について
・情報交換会、なすかし雪遊び隊、高体連（関東高等学校登山大会、全国高体連常任委員会）
オ）ジュニア登山研修会：登山とクライミングを一緒に活動したり、クライミングだけでもいいのではないか。
⑵国際委員会
11月９日㈬　出席８名、委任４名
ア）ロシア女性Ｆｅｓ．（Irina）より来夏エルブルースへのお誘い
大宮委員が参加考慮中。６/24－７/２南のルートからを希望。今後調整。
イ）第３回山岳スキーミーティング（11/４ 栂池）報告
過去の選手、スタッフ等13名参加。
イ）第３回海外登山懇談会について　11/17㈭ オリセン（セー304）
ウ）平成29年度６月総会兼海登研の会場確保について
エ）平成29年度の事業計画、予算について
①海外登山技術研究会：もっと魅力ある事業にする。海外からの有名ゲストも考えたい。海外に限らず、日本のアルパインクライミングを牽引するものにする。要再考。来年度は東京開催。
②海外登山懇談会：先鋭的ばかりではない登山の楽しみ方を紹介。例年通り。
③海外登山奨励金：申し込みも増えており、200万円ほどに増額を希望する。
④ＢＭＣクライマーズミート派遣：来年度は夏冬２回開催なので、予定通りの80万円。
⑤国内ＷＣＭ協賛：例年通りの20万円。
⑥国際情報ｗｅｂサイト構築：海外からの情報翻訳料の計上。
オ）国内外に向けてのＨＰ案について
⑶自然保護委員会
11月17日㈭　出席13名　委任２名
ア）第７回関東地区自然保護指導員研修会報告
11月５日　52名参加（於オリセン）
イ）山岳団体自然環境連絡会
11月24日（労山事務所）シカ害シンポジウム→今後継続（松隈、廣田参加）
ウ）第40回自然保護委員総会報告／確認とまとめ
各分科会の討議内容をふまえ、今後の活動につなげる。今後に展開していく方法は？
エ）第40回自然保護委員総会での提案の取扱いについて
オ）小島委員提案の取扱いについて
ハセツネレースでの問題点→鈴，ライト，ストック等の自然環境に与える影響を考える。
カ）自然保護指導員登録受付について
随時受付けている現在の方法を続行→途中登録の場合仮カード発行し、腕章手引は配布
キ）自然保護委員会プロジェクトについて
ク）出前講座の実施について
・全国に働きかける
ケ）ＪＯＣスポーツ環境委員会報告
11月18日、都庁都民ホール（岩崎、猪狩、松隈）
コ）山岳団体自然環境連絡会シンポ／環境省打合せ　11月24日、環境省（松隈）
サ）山岳団体自然環境連絡会
11月28日於：労山事務所
⑷指導委員会その１
11月７日㈪　出席13名 委任３名
ア）夏山リーダー検討会（10/25）
・テキスト進捗状況チェック。
・英国のＭＴ視察報告（西内）
イ）ＳＣ指導者養成講習会について
①宮崎・ＳＣ上級指導員（10/23－24）について
②ＳＣ指導員養成講習会・中国ブロック合同開催について
③ＳＣ上級は、外岩の経験が必要。懸垂下降や、支点の構築など、必要な技術は事前に通達して、習得しておいて貰う。
④ＳＣ主任検定員養成講習会について
宮崎・ＳＣ上級指導員養成講習会で下村真一１名
中国ブロック・ＳＣ指導員上級指導員養成講習会で佐藤建
１名をそれぞれ、講師兼主任検定員受講生として養成講習会を実施
⑤ＳＣコーチについて
ウ）指導者制度改定について
平成30年度より日体協の指導者制度（名称、内容）が大幅に改正される。
2016年12月に再度アンケート調査があり、それを元に2017年３月までに骨格を作る予定
エ）安全登山実践講座テキストについて
在庫ゼロとなったため、500部発注販売価格は、300円に決定。
オ）スポーツクライミングテキストについて
在庫切れ。平成29年度の改訂版を作成中。
カ）スポーツ指導者専門科目修了認定申請について
・ＳＣ指導員（茨城開催）：７/９～８/21（茨城）小森栄治、佐藤常雄、菊池正則、笹原健一、佐藤正彦、黒沢昌弘、國井敬一、宮下直人、是枝正國、木村実、石井裕子、阿部勝義、森正夫
（千葉）西谷善子、（群馬）滝口諄人、（栃木）根津宏毅、（福島）落合淳利
受講者：17名全員合格とする。
キ）表彰被候補者推薦について
①日体協・推薦状受理（修正の上）　雨宮、亀田、西原
②日山協・新春懇談会表彰（2017年１月14日）古屋（山梨）、山根（山口）
ク）冬期指導常任委員研修について
２月11日（土）10時から都岳連事務所にてＡＣの検定基準会議を行う。ＳＣ検定基準も行う。
ケ）大山氷雪技術研修（２/18－19）について
コ）平成29年度の体制について
⑸指導委員会その２
12月５日（月）出席13名、委任４名
１）夏山リーダー検討会（11/29）報告
・名称をハイキングリーダーに変更。
イ）ＳＣ指導員養成講習会・中国ブロック合同開催について
ウ）ＳＣ主任検定員養成講習会について
エ）ＳＣコーチの位置づけについて
・11/17：日体協の意見ヒヤリング
オ）指導者制度改定について
カ）安全登山実践講座テキストの増刷について
キ）スポーツクライミングテキストの改訂版について
ク）表彰被候補者推薦について
①日体協・推薦状受理（修正の上）　雨宮、亀田、西原　日体協から承認連絡有り
ケ）冬期指導常任研修について
コ）大山氷雪技術研修（２/18－19）について
・鳥取山協で２/18－19で大山館予約済。
⑹遭難対策委員会
10月26日㈬　出席８名
ア）英国（ＭＴＣ）訪問の報告について
・PLASY BRENINの英国レクリエーショナルセンターにあるマウンテントレーニングセンターを訪問。訪問した際、９つの講習が併行して開催されており、150名の受講生が宿泊。スタッフは98人ということで規模と内容に圧倒された。
・受講者の年齢も若く、受講費も安くない（マウンテンリーダー６日間で45ポンド）のに受講者が多いのは、教育が体系化されていることや、山岳会の中に教育機能がないこと、講習が机上ではなく登山実技が中心で登山経験の豊富なインストラクターが６人に１人というレシオ（講習によっては４人に１人）でつくことなどが考えられる。
・マウンテンリーダーの講習内容は日本の山岳指導員と同等以上であることがわかった。日本では山岳指導員をインストラクターとしているが、英国のマウンテンインストラクターはマウンテンリーダーを取得し、経験を積んだ上で、インストラクター講習、資格認定を受ける必要があり、上級山岳指導員同等以上（主任検定員クラス）である。ただし、日本では教育の体系化が不十分で指導員の中でレベル差が大きい。
１）夏山リーダー資格に関して
・シラバスの体系は完成した。それにあわせテキストの章立てを作成し、分担を決めて作成中。
・初級登山者を対象に考える。

・教育体系の全体の枠組みを西内が次回までにまとめる。
・枠組み、今後の進め方について 12/ 4(日)に1日かけて審議する。
２）ＩＣＳに基づく雪崩捜索救助訓練コースについて
・10/17（月）打ち合わせを実施
・ＩＣＳ（Incident Command System）とはアメリカやカナダで国家レベルで標準化されているもの。あらゆるインシデントで共通に必要な機能を標準化したもの。
・カナダからパークレンジャーのガース氏を招き、２月６～９日頃に谷川岳で講習を実施する。定員12名。
・名称はＡｖＳＡＲ連絡協議会、ＡｖＳＡＲ標準化委員会などがあがっている。
(7)競技部競技委員会
11月５日(土)　出席14名
ア）11月常務理事会報告
業務報告、第３回理事会次第、臨時総会次第、組織・管理運営規程改正、競技規程改正等について
イ）来年度の組織体制について＝国体委員会
・担当制の確立、スケジュールの確認
ウ）日体協公認指導者制度について
エ）ブロック別研修会開催準備状況
オ）第72回愛媛国体準備状況について
カ）第73回福井国体開催地ヒヤリング報告
キ）第77回栃木国体正規視察報告
ク）パラクライミング実施要項について
・１月22日(日)明治大学和泉キャンパス
ケ）その他
・ブロック別研修会資料について
・競技規程の改正について

６．その他の重要事項

11月４日～11月29日
(1)第55回全日本登山大会・島根大会
11月４日(金)～６日(日)　於：島根県三瓶山周辺　八木原会長、尾形副会長、仙石常務理事
(2)ＵＩＡＡ登山委員会
11月４日(金)～５日(土)　於：ヨルダン
青山遭対副委員長
(3)自然保護指導員研修会　11月５日(土)
於：国立オリンピック記念青少年総合センター　松隈委員長
(4)ＩＦＳＣ世界ユース選手権大会
11月７日(月)～13日(日)　於：中国・広州　小日向委員長ほか
(5)（一財）全国山の日協議会運営委員会
11月８日(火)　於：四谷保健センター
尾形副会長
(6)全国山岳遭難対策協議会中央幹事会
11月８日(火)　於：文部科学省
西内常務理事
(7)第３回理事会　11月13日(土)
於：ＴＫＰ渋谷コンファレンスセンター　八木原会長、他
(8)臨時総会　11月13日(日)
於：ＴＫＰ渋谷コンファレンスセンター　八木原会長、他
(9)ＵＡＡＡ総会
11月14日(月)～23日(水)　於：カトマンズ　八木原会長、小野寺常務理事
(10)加須市長表敬　11月16日(水)
於：加須市役所　尾形副会長、森下競技部長、中瀬常務理事
(11)第３回海外登山懇談会　11月17日(木)
於：オリンピック青少年センター
尾形副会長、澤田委員長
(12)東京五輪組織委員会・ＮＦ協議会
11月18日(金)　於：虎ノ門ヒルズ
尾形副会長
(13)ＩＦＳＣボルダリングＷＣ八王子2017合同記者会見　11月22日(火)　於：八王子市役所　尾形副会長、森下競技部長、小日向委員長
(14)鳥取県山岳協会創立50周年記念式典・祝賀会　11月26日(土)　於：米子市
八木原会長
(15)近畿地区山岳連盟総合会議
11月26日(土)～27日(日)　於：大津市・げんき村宿泊棟（旧比良山岳センター）
高橋副会長
(16)東北総体山岳競技ブロック会議・競技部ブロック別研修会　11月26日(土)～27日(日)　於：秋田市
尾形副会長、松田常任委員
(17)ＪＯＣ ＮＦ総合支援センター研修会
11月29日(火)　於：岸記念体育会館
小野寺常務理事

寄贈図書

寄贈本	川村 匡由	「地域福祉源流の真実と防災福祉コミュニティ」著：川村 匡由
	東京新聞出版部	「登山の運動生理学とトレーニング学」著：山本 正嘉
雑誌	(株)山と溪谷社	「ROCK & SNOW」074
	(株)ソル・メディア	「CLIMBERS」＃002
	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.835
	(株)山と溪谷社	「山と溪谷」No.981
会報	(公財)日本ボウリング協会	「JBCnews」第541号
	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第327号
	(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.464
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第594号
	日本学術会議	「学術の動向」Vol.21
	長野県山岳協会	「やまなみ」No.223
	(株)シマノ	「Fishing Café」VOL.55
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」№326
	(公財)日本体育協会	「体協スポーツニュース」「体協フェアプレイニュース」2016年12月12日号
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.503
	中国登山協会	「山野」2016 12 総220期
	一等三角點研究會	「聳嶺」新世紀第九号 創立十周年記念号
	一等三角點研究會	「一等三角點 白もんどう」
	(公財)全国高等学校体育連盟	「全国高体連ジャーナル」Vol.32
	(公社)日本山岳会	「木の目草の芽」第125号
	korean Alpino Federation	「大山聯」Vol.216
	やまびこ山想会	「やまびこ」第168号
	(公財)尾瀬保護財団	「はるかな尾瀬」Vol.32
	京都府体育協会	「京都府体協時報」第123号
	東京野歩路会	「山嶺」No.1042
	(一財)日本防火・防災協会	「地域防災」No.11
	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」第438号
	大阪府立体育会館	「季刊 府立体育会館」No.119
	NPO法人富士山測候所を活用する会	「芙蓉の新風」Vol.11
	(公社)日本山岳会	「山」No.859
	同志社大学山岳会	「山 その大いなる旅Ⅱ」創部90周年記念誌
	ヒマラヤ協会	「HIMALAYA」No.479
	日本山岳文化学会	「日本山岳文化学会論集」第14号
	安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター	「人と自然」第6号

編集後記

年が明けて酉年を迎えました本年も宜しくお願いします。本協会は昨年臨時総会で決議された名称変更等が実施される。登山とスポーツクライミング片肺飛行にならない様、坂の上の雲を目指し未知の領域へ羽ばたきたい。ご協力を。

（広報担当 水島彰治）

登山月報　第 574 号
定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　平成29年 1 月15日
発行者　東京都渋谷区神南 1−1−1
岸記念体育会館内
公益社団法人日本山岳協会
電　話　03 − 3481 − 2396
ＦＡＸ　03 − 3481 − 2395

NPO法人 北丹沢山岳センター
事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
TEL 042-687-4011 FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
蛭ケ岳山荘
TEL:090-2252-3203
神の川ヒュッテ
TEL:042-787-2276
和田峠「峠の茶屋」
TEL:042-687-2882
理事長・代表 杉本憲昭

NPO法人 北丹沢山岳センター
神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
TEL 042-687-4011 FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
◦ 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
◦ 陣馬山トレイルレース実行委員会
◦ 道志村トレイルレース実行委員会
◦ 八重山トレイルレース実行委員会
◦ 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
◦ 上野原秋山トレイルレース実行委員会
大会々長 杉本憲昭

山岳雑誌 岳人

山と人、
時代をつなぐ
「岳人（がくじん）」。

ひとたびページをめくると、先鋭的な現役クライマーから、散策を楽しむ登山愛好者、一線を退いた往年の登山家まで、"岳（ヤマ）"を愛するすべての人々の想像力と冒険心をかきたてる、そんな存在でありたい。山の魅力や楽しさ、そこで生まれた文化を伝え、山と人との関係をより良いものにしたい、そんな思いを込め「岳人」をお届けします。

2月号
1/14発売

「岳人」2017年2月号
特集 絶景の冬山を楽しむ
―上高地ほか―
[好評連載]石川直樹「アジアの山に生きる」／竹田和夫「オホーツクの村物語」ほか
税込680円(本体)
※モンベルのウェブサイト、全国のモンベルストアでも取扱中！

年間購読がおすすめです。

購読割引　送料無料　限定品プレゼント

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常本体価格12冊 8,160円(本体)（税込8,812円）→ 年間購読12冊 7,480円(本体)（税込8,078円）

14冊で680円 1冊分無料

年間購読特典
岳人オリジナル
コンパクトフォームパッド

使用サイズ 35×26×0.8cm

年間購読お申し込み方法

●ウェブサイトで
http://www.gakujin.jp

●お電話で（受付後に郵送用紙をお送りします）
0120-982-552／TEL 06-6538-5797
※フリーコールが使えない・携帯からはご利用いただけません。

●全国のモンベルストアで
http://store.montbell.jp

日本山岳協会 山岳共済会　〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL 03-5958-3396　FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日　10:00～17:00（祝日除く）

携帯からも資料請求ができます。
公益社団法人　日本山岳協会　携帯サイト
（www.jma-sangaku.or.jp/mobile/）

WEBからもお申込みいただけます（ www.sangakukyousai.com ）